

# 芋の秋湧いて泪のふたみつぶ

藤田湘子

口元が少しゆがんで、あ、泣きそう、と思つたら泪が滲んできて、粒となつてこぼれ落ちる。芋の葉を転がる露のようにこらえきれなくなった泪の粒。それを見ていられる作者の精神をどう捉えたらいいのだろう。「湧いて泪のふたみつぶ」とは言い得て妙。何度もその情景が心にしまわれていたのではないだろうか。

「泣きぎまの昔はよよと鶏頭花」と詠んだこともある湘子。泣きぎまにもいろいろあつて、いろんな泪から目をそらさずに、それをじつと見ていた湘子の目に、情愛の深さと、透徹した冷たいまなざしの一端も感じられる。芋の秋の懐かしい景と、爽冷きとも通じるのではないだろうか。

1986年 (558.08.26作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京